

宗教／スピリチュアリティが臨床の場に介在することの意味

企画・司会：松島公望（東京大学）

話題提供者：武田正文#（高善寺）

渡辺慶一郎#（東京大学）

小笠原将之#（関西福祉科学大学）

大村哲夫（上智大学）

指定討論者：島井哲志（関西福祉科学大学）

【企画主旨】

日本における臨床の場において、「宗教／スピリチュアリティ」の問題は腫れ物扱いにされたり、タブー視されたり、時に排除されたりと、いわゆる「厄介者」として扱われることが少なくないように思われる。人間を深く考察し、捉えようとしたときに「宗教／スピリチュアリティ」の問題が必ずと言って良いほど浮上してくるにもかかわらず、人間の深い領域に寄り添う「臨床の場」においてそれらを厄介者扱いにしてしまうということは、人間の根幹となる領域から目を背けたり、回避したりするといったことにはならないだろうか。と述べつつも臨床の場において宗教／スピリチュアリティを扱うことがどれだけ困難であるかも承知している。しかし、困難であるからといって厄介者扱いのままにして良いのだろうか。本ラウンドテーブルでは真正面からこの問題と向き合い、それぞれの話題提供、指定討論を通して、「宗教／スピリチュアリティが臨床の場に介在することの意味」について検討し、議論したいと考えている。本ラウンドテーブルを通して、日本における臨床の場の現状を打開する「新たな一歩」になればと願っている。

【話題提供】

◆「臨床の場とお寺という場—空間と関係性とスピリチュアリティ—」 武田正文

私は、狭い田舎社会のなかで、僧侶という立場と臨床心理士としての立場を行き来しながら活動しています。地元で生まれ育ったので、同級生やお寺のご門徒さんなどのさまざまな繋がりがあり、常に多重関係を意識しながらカウンセリングを行っています。このような立場なので、臨床の場において宗教性は複雑で曖昧に表出してきます。特にお寺という場で行うカウンセリングに注目しながら、空間と関係性について考察します。

◆「ヌミノース体験と精神症状の異同/精神科臨床からの報告」 渡辺慶一郎

精神疾患の経過中に出現したヌミノース体験を、精神病症状との区別について、我々が行った事例報告を元に話題提供を行う。精神疾患と宗教体験は元来親和性があるためそれ程稀な事例ではないが、あらためて吉松（1988）の論考を元に、神の存在を確信する根拠となった本体験を、超越的他者の在り方、体験の侵襲性、主体の障害、自己の在り方の4点で整理した。このプロセスを通じて宗教／スピリチュアリティが精神科臨床の場に介在する意義を共有したい。

◆「精神の《外部》をめぐって—主体的機能の裏付けとしてのスピリチュアリティ—」 小笠原将之

本報告では、人間の精神的健康や主体的機能が、精神活動の内面の要素に還元できない契機、即ち精神の《外部》という基盤の上に成立していることを、自験症例の経過も踏まえて構造的に述べる。演者が「超越論的他者」と概念化しているその《外部》こそがスピリチュアリティ、即ち宗教で言うところの「神」や「仏」の本質に相当するものである。以上の理解に基づき、精神疾患と呼ばれる現象の出来やその解決の過程、および治療的な関与の要点に関しても考察を加える。

◆「認知症高齢者の心的世界からみた死への移行—死者ヴィジョンがもたらす穏やかな死—」 大村哲夫

心理臨床という実践の場に、宗教性／スピリチュアリティに開かれた視点は欠かせない。今回の話題提供では、緩和ケアの現場で患者がよく見る「既に死んでいる親しい死者の姿」すなわち「死者ヴィジョン」を見ることによって死の受容の助けになる事例と、認知症患者への長期にわたる面接の結果、浮かび上がってきたので患者の死生観と死への移行過程を紹介する。いずれも患者の体験したpsychic realityが、看取りの質に影響することがわかる。